

# 新書紹介

## 地方文化論への試み

埴 作 著

辺境社 B 6版 三六九頁 一、八〇〇円

Ⅲ雑感、Ⅳ日記抄の四章から構成されている。

たのであろう。

第二章の「茨城の歴史と文学」

では、「近代化を促すものと阻むもの」「水戸学の伝統」などにより為政者によって色どられた歴史ではなく、事実としての歴史の認識を訴え、人間の開放なくしては真によい文学の生れる素地がないと説いている。

最後の「日記抄」は、終戦直前から岩波書店の時代、茨城県史編さん事業を始めるころまでの日記を、そのまま載せたものである。

本の思想界をリードした雑誌であった。その編集に従事した著者が、茨城に移り住むことになったのは何か。「文化果つる地」へきてみて、人生を転換させたことの意味みたいなことを納得することができたかどうか」という問いかけに、「広い

東京では、世界が非常に狭かったが、茨城県に来て地域的には非常に狭いところだけれども、ある面では非常に広いところですね。」と答えている。東京を

元節の亡霊」「前時代の残滓」等現代社会や地域社会の矛盾について、歴史家としての大胆な意見が述べられている。封鎖性の強いこの地域で、お国自慢と

日本人の日常の行動原理は、近隣あるいは世間の思惑を基準にしているといわれる。若い時は、理想主義を掲げている人も、大人になるに従って、環境への順応を余儀なくされているのが現実である。

著者自身、「私にとって、敗戦直前から現在にいたる年月は、私なりにではあるが、ほんとうに多端であった」と述懐している。これは、戦中、戦後を生きてきた人達にとって、大なり小なり共通する感慨と言えよう。著者は、昭和三十八年、長い都会生活にピリオドを打ち、

後進県と言われる茨城県へ移り住む。そこで県史の編集を通して県民意識の自己改革に情熱を

しかしこうした抵抗をおそれていては、社会の進歩はあり得ない。「歴史へのあやまれる認識は、文化の荒廃をもたらす。それはまた「人間」の蔑視につながる。」と熱っぽく語りかけているのである。

「地方文化論への試み」の著者は、その数少ない一人であろう。

これは、戦後の三十年を、生活苦と戦いながら、常に自己の向上を求め、人間として、どう

本書は、I 東京をすてて十余年、II「茨城の歴史」と文学、

III 雑感、IV 日記抄の四章から構成されている。

第一章の東京をすてて十余年は「私のなかの茨城」「岩波書店時代」など石川次郎氏との対談形式で述べている。岩波書店の「世界」といえば、戦後の日本の思想界をリードした雑誌であった。その編集に従事した著者が、茨城に移り住むことになったのは何か。「文化果つる地」へきてみて、人生を転換させたことの意味みたいなことを納得することができたかどうか」という問いかけに、「広い

これは、戦後の三十年を、生活苦と戦いながら、常に自己の向上を求め、人間として、どう

本書は、I 東京をすてて十余年、II「茨城の歴史」と文学、

III 雑感、IV 日記抄の四章から構成されている。

第二章の「茨城の歴史と文学」

では、「近代化を促すものと阻むもの」「水戸学の伝統」などにより為政者によって色どられた歴史ではなく、事実としての歴史の認識を訴え、人間の開放なくしては真によい文学の生れる素地がないと説いている。

これは、戦後の三十年を、生活苦と戦いながら、常に自己の向上を求め、人間として、どう

本書は、I 東京をすてて十余年、II「茨城の歴史」と文学、

III 雑感、IV 日記抄の四章から構成されている。

第二章の「茨城の歴史と文学」

では、「近代化を促すものと阻むもの」「水戸学の伝統」などにより為政者によって色どられた歴史ではなく、事実としての歴史の認識を訴え、人間の開放なくしては真によい文学の生れる素地がないと説いている。